ライフスタイルのトレーニング

大　澤　正　明

【はじめに】

ＪＩＣＡ（国際協力事業団）の固形廃棄物の専門家として２年間赴任したインドネシアにはゴミ焼却施設がなかった。集めたゴミは一部非公式なリサイクルが行われる以外はそのまま埋立処分場に持っていかれる。それなのに、たまに街角で、「湿ったゴミ」と「乾いたゴミ」と書かれた分別容器が置いてあることがあった。どうせ同じトラックに混載して埋立地まで運んでしまうのに分別しても意味がないではないかと、インドネシア人のパートナーに聞くと、

「Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ」

と答える。いつか、分別収集を実施する時のために、今から分別の習慣をつけておくのだという。なんと気の長い国民だろうと驚き、半ば嗤ったものだが、今、考えると、それは、ひょっとすると、正しいことなのかもしれない。分別の習慣が新しい処理システムを作り上げることがあるかもしれないし、それどころか、（それが幸せなことかどうか別にして）インドネシア人を世界一勤勉で実直な人種にしていくきっかけになるかもしれない。あるいは、ひょっとして、あと５０年たっても、同じように意味のない分別というＥｄｕｃａｔｉｏｎを続けているかもしれない。誰もそれはわからない。

考えてみると、わが国の廃棄物対策も、多くの失敗と成功を繰り返してきた。今、試みられようとしている施策も、果たして私たちの居住環境の向上や地球環境の保全によい結果を生むのかどうかも分からない。分からないことだから、今、みんな一緒に考えてみることは、たぶん、私たちの将来にとって、いいことなのかもしれない。

というのも、今、はっきり分かっていることは、私たちのライフスタイルは、明らかに間違った方向に向かっていると思われるからだ。大量生産・大量消費・大量廃棄という環境問題としての定番は言うに及ばず、「いじめ」とか「引きこもり」とか「キレル子」とか、なんだかよく分からないけれど、不吉な気配を漂わせる最近の世相は、やはり、このまま放って置いてはいけない大きな問題だと思う。そして、そういう不吉な世相は、よく見ると、ゴミ問題を取り巻く人々の様々な営みの中に典型的に現れているような気がする。ゴミ問題というのは、人々のライフスタイルの最終的に行き着いた結果だからだ。

これから、私は、正しいのか、間違っているのか、現時点では明らかになっていないゴミ問題や対策のいくつかを紹介することにする。それを、一緒に考えていくことが、私たちの生活様式を見直してみるきっかけになると思うからだ。

１．現代版日本三文オペラ
－＜正義＞は＜あわれみ＞の心より大切なことか－

アパッチ

ゴミの集積所から資源ゴミを持ち去る人たちのことを＜アパッチ＞と呼ぶことは知っていた。

開高健の作品に「日本三文オペラ」という小説があるということも、読んだことはないまでも、存在だけは知っていた。

しかし、「日本三文オペラ」が、戦後間もない頃、廃墟と化した大阪兵器工場跡地を舞台に、警察の目を盗みつつ、屑鉄をあさり売りさばくアパッチ族と呼ばれる人たちのことを題材にした小説で、今も集積所で資源ゴミを持ち去る人たちのことを＜アパッチ＞と呼ぶのは、その人達を起源として連綿として続いてきた言葉であるということは、つい最近まで知らなかった。

今、再び、アパッチの存在が問題化しているのは、資源ゴミ集積所から古紙を抜き取る事例が頻繁に発生しているからだ。

たとえば、杉並区では、平成１５年３月に「資源ゴミは区に帰属する」旨の条例改正を行ない、これを機に全国各地で同様の条例改正の動きが見られるようになってきた。

あるいは、また、埼玉県の草加市。平成１６年２月に、ゴミ集積所から持ち去った古紙の中に２８００万円の現金が発見されるという奇妙な事件が発生した。届け出た者が市の指定業者ではない、いわゆる、アパッチだったことから、市では「古紙と一緒に出された２８００万円も市の財産」と所有権を主張し、当初は、届け出た者を窃盗容疑で告訴することも検討していたが、その後、届け出た者が「騒ぎに疲れた」と所有権を放棄し、市も「所有権を規定した条例・規則がない」との理由で告訴を断念したという。

さらに、京都市では、古新聞８束（７３円！相当）を持ち去ろうとしている６３才の男が、ＰＴＡと契約している回収業者によって警察に突き出され、窃盗容疑で逮捕されるという事件があったという。(AOL NEWS 2003.12.09)

こういった、一連の事例を眺めていると、「なんとまあ、あの古新聞が、ここまで偉くなったものだ」と驚く。なにしろ、「古紙はなぜ余るのか」（紙業タイムス社）という、全編これ古紙回収業界の悲鳴と恨み節に充ちた書籍が世に出たのが１９９８年のことだから、つい最近のことなのに、いつの間にか、奪い、奪われまいと争うほどの貴重な存在に成り上がってしまった。

そして、もう一点感じることは、元祖アパッチ族が活躍した１９５０年代からすでに５０有余年も経過しているのに、アパッチ族という人たちの立場はほとんど変わっていないということだ。夜の闇に紛れて屑鉄を掘り起こし売りさばくアパッチ族とそれを取り締まろうとする警察の追いかけっこは、そのスケールと迫力は悲しいまでに小さくはなっているが、形としては現在の問題とよく似ている。

元祖追いかけっこは、ホンマものの、ガチガチの、いけない差別から発しているものとするならば、現代のそれは＜民主的な差別＞あるいは＜正義の差別＞というものが根底にあるような気がする。

古紙はこうして偉くなった

まずは、古紙回収の歴史というか、古紙の成り上がりの経緯を追ってみよう。

わが国で古紙回収が本格的に始まったのは、１９７５年頃からで、１９７２年のローマクラブの報告によって資源の有限と地球環境の未来への警告がなされたことと、１９７３年と７９年の２度のオイルショックにより資源保護が大きな関心事になったことよる。[④] 古紙回収率もこの頃から大きく上昇している。

家庭古紙の回収方法については、戦前はゴミ箱から紙屑を収集して回る程度だったようであるが、戦後は１９６５年頃まではリヤカーを引いたクズ屋さんが、家庭を定期的に回り古紙、古鉄、古着を買い取っていた。[⑤]　その後、「まいどおなじみ」チリ紙交換の時代を経て、集団回収、自治体回収へと移っていく。

古紙回収業界が、＜古紙余剰＞という窮地に陥るようなったのは、１９９６年頃のことだという。古紙の入荷と出荷のバランスが崩れ始め、１９９７年には史上最大の在庫過剰を記録した[③]。

先の、「古紙はなぜ余るのか」によると、古紙余剰の原因として以下のようなことがあげられるという。

①従来、古紙回収量は民間の経済メカニズム（価格が上昇すると回収量は増え、逆の場合は減る）によってバランスが取られてきたが、ゴミ減量の必要から多くの自治体が古紙の回収量に応じて市民団体や回収業者に補助金を支給するようになったことや、自治体自身が古紙回収を積極的に行うようになったことによって、価格が下がっても回収量が減らないという現象が生じてきたこと。

②古紙輸入の増加と輸出の減少。さらに輸入雑貨や現地生産した家電の逆輸入などに付随して入ってくる紙類の増加。

③古紙の需要が民間の自助努力に任されており、消費が十分に進んでいない。

こうした危機的状況を受け、同年３月には回収業者で組織する日本再生資源事業協同組合連合会（日資連）が、次いで４月には製紙原料問屋の全国組織である全国製紙原料商工組合連合会（全原連）が決起大会を開催し、「古紙回収コストの保障」や「古紙余剰時の備蓄基地の整備」や「古紙利用促進法の早期実現」を求めた。

しかし、この苦境はわずか２年間で解決の方向へ向かい始めた。

当面の在庫を減らすために、採算を度外視して開始していた古紙の輸出が、輸送方法の工夫などによって、順調に進展していったのだ。決起大会からわずか１年半後の１９９８年１１月には、＜古紙、余剰から一転して不足へ＞という言葉が業界紙の見出しを飾るようになり、１９９９年３月には、＜アパッチ増える＞という文字が並ぶようになった。[⑥]

そして、あっという間に立場は逆転した。

わずか２年で、＜余剰＞であった古紙が、盗まれるまでの＜貴重品＞に転換した理由としては、以下のようなことが指摘されている。

①古紙の輸出量の急増により古紙需要が向上したこと（図表１－３）

②従来輸入という選択肢を持つ製紙メーカーが古紙価格を安値で安定させてきたが、円安によって古紙の輸入が困難になったことと、逆に古紙問屋が輸出という選択肢を手に入れたことによって、古紙価格がやや向上してきたこと。[⑥]

③メーカーの脱墨技術の進歩によって、古紙需要が増加したこと。

かくして、古紙は貴重品になった。「集積所に出された資源化物の所有権は、市に帰属する」とまで表現される立場に成り上がった。

それはそれで、目出度いことではあるが、この貴重品を取り巻く人々の思惑は千々に乱れている。

すべての人が正しい

＜バブル景気＞という時期。

一応１９８６年から１９９１年までの５年間を指すのだという。

その５年間で、ゴミ排出量はどのような変化をしているかというと、約１１％増加（１人１日あたり１００５ｇ→１１１７ｇ）している。そして、ゴミ処理コストは、なんと約４９％も増加（１人１年間あたり８６００円→１２８００円）している。

ゴミ処理のための費用の大部分は税金から供出されているわけであるから、市町村の担当者にとって慌て焦るに足る十分な変化なのである。さてどうするかとなると、リサイクル。ゴミ１キロ処理するためのコストは、３０円強（１９９１年）であったから、古紙１キロにつき５円や１０円の助成金を出したとしても十分もとが取れると判断したことは決して間違いではない。公費を極力節減するということが公務員の役割の一つであるから、それは正義に基づいた判断であった。

さて、住んでいる市町村の役所がそういう判断をし、議会の合意も得られたならば、住民として、そのシステムに従うことは当然である。古紙を集積所に持っていく、あるいは自治会の当番ならば､分別の指導のために集積所に立つということは当然のことであるし、賞賛されるべき姿ではある。その時、見知らぬ輩がうろついて、いつの間にか古紙を持ち去ってしまったと知ったとき、「気持ちが悪い」あるいは「頭に来る」という感情を持つのは自然なことであろう。まして、１０数分別という多種分別の場合は、集積所の指導員と排出者との軋轢も大きい。「こんなに苦労して分別に協力しているのに、わけの分からん輩に持って行かれるくらいなら、もう金輪際協力なんかするもんか！」「分別なんかやめて、可燃ゴミとして出してやる！」と叫んだとしても、まぁ、賞賛されることではないかもしれないが、とんでもない発想だと非難されるほどではないかもしれない。

少年野球の活動資金の一部として、廃品回収をするということは、お金の大切さを子供達に教えることにもなり、大切な教育活動の一つである。子供達が協力して、案内のチラシを作り、各家庭の郵便ポストに入れる。そして、当日、親子協力して回収し、ついでに各家庭の郵便ポストに「ご協力ありがとうございました」のチラシを入れておく。子供同士の工夫、親子の連携、地域の協力等々、教育のあり方としては申し分のない空間に見知らぬ輩がやってきて、貴重な汗の結晶を持ち去ってしまう。おまけに、新聞の売り上げ代金プラス役所からの助成金共に失ってしまうのだから、怒って当然である。

さて、そんな怒りを訴えられた役所、放っておいたら公僕の名がすたる。なんとしても、不正な抜き取りを防止しなければいけない。しかし、現在の法体系では窃盗罪として摘発することが難しいと専門家が判断したとするならば、条例を改正しようと判断することも無理がない。

一方、厳しい入札を勝ち抜いて、市公認の回収業者に収まったと思ったら、得られるは

ずの半分にも満たない古紙しか集まらない。誰かが、どこかへ持っていってしまうからだ。たかが７８円分の古紙だとしても、そんな不逞の輩を警察に突き出してやらねば気持ちが収まらない。それも正当な感情だ。

結局、すべての人たちが正しい。怒ることはまさに正義なのである。

少年の汗と老人の汗は、どちらが美しい？

「そりゃあ、少年の汗の方が美しいに決まっている」と誰でもが言うだろうし、そのことにはまったく異存はない。まして、少年の場合は明るく楽しく、地域のためにも、彼ら自身の将来のためにもなる有意義な活動に伴う美しい汗であり、老人の場合はとりあえずの食い扶持を不正な方法で稼ぐための汗である。おまけに、ついでに言うならば、老人の汗は汚らしいし臭い。できるならば、身近な場所にいてほしくない。しかし、そういう風に老人の汗はよろしくないと切って捨ててしまうような社会というのはいかがなものだろうか。

とりあえず、なんとしても、私たちが理解しておかなければいけないことは、リサイクルという営みは、もともと「差別」する社会によって成立してきたものである。人種差別、学歴差別、そして社会に順応できないあらゆる人達に対する差別。たぶん、リサイクル事業に従事してきた人達の中には、そうでない人達と比べてかなり高い確率で、アウトローと呼ばれる人達が含まれるのかもしれない。反社会的な人達がいたのかもしれない。しかし、リサイクルという営みはそういう人達が支えてきたのだ。

いつの頃からだろうか、リサイクルは滅多やたら明るい営みになってしまった。そして、リサイクルを率先して実行する人達は、正しい人で社会の範とするべき人達になった。それは、よいことである。それを認める社会もよい社会である。廃棄物業界が発信し続けてきた環境教育の華々しい成果の一つといってよいだろう。

しかし、それによって、弱者や社会の一線から落ちこぼれてしまった人達を排除することになったとしたら、それはよいことではない。

「決められたルールや枠組みから外れた人を許せないという風潮」が、最近目に付くようになってきたような気がする。「オヤジ狩り」なんて聞くと身につまされるが、ホームレスを襲う少年達。これも、たぶん「社会のクズを掃除する」というような意識なのだろう。現在の小学校で横行しているという「いじめ」とか「シカト」も、勉強の良くできる優等生が、だめな子を排除する、ルールに従わないから成敗する、ウザイからシカトする、臭いからシカトとするというのも、たぶん正義が悪を駆逐するという、意識の上ではそういうことなのだと思う。

そんな風潮はやはりいいことではないだろうと思う。

クラクション１回分のあわれみ

ごく最近、日曜の午後のことだった。運動がてらのサイクリングを楽しんでいた時、突然、「ブッ・ブッ・ブッ」と、３回、たて続けにけたたましいクラクションが鳴り響いた。びっくりした。胸が縮み上がってしまうような激しい音だった。

振り返ると、自転車の荷台の左右両脇と、ハンドルの左右両脇、計４箇所に、目一杯のアルミ缶を詰め込んだ老人が、フラフラヨロヨロと車道の中央近くまではみ出して自転車を走らせていた。車の運転手は、もう一つ、ひときわ長い「ブー」を鳴らし、ついでに「ブ

ッ・ブッ」ともう２つ、計６回のクラクションを残し、走り去っていった。明らかに苛立っている。キレていると言っていいかもしれない。

私は、その６回の音にすっかり動転して、うろたえ、別にその老人に同情したわけでもないのに、フラフラと後をついていった。老人は、ほどない距離にある金属スクラップ工場に入っていった。

日を改めて、その工場を訪ねると、

「ホームレスだよ」

という。１キロほど先にある公園を寝ぐらにしているホームレスなのだという。

「ウチにはあまり来ないね。あの程度の量をもらったって何にもならないから安いよ。キロ５０円から６０円というところだから、千円にもならないさ。まっ、人助けだね」

積極的に受け入れていると思われるのは迷惑だという様子だった。

すでに述べたように、古紙を初めとする資源回収が盛んになったのは、１９７２年のローマクラブ報告以来のことである。そのローマクラブの委嘱により「成長の限界」を起こしたドネラ・Ｈ・メドウズは、その２０年後に「成長の限界」の続編とも言える「限界を超えて」を１９９２年に発表した。「成長の限界」においては「人口の増加、工業化、汚染、食料生産、資源の利用の成長率が現在のまま続けば、あと１００年以内に地球上の成長は限界に達し、危機的な状況を迎える。その結果、最も起こる見込みの強い結末は、人口と工業力の突然の制御不可能な減退」と警告した。そして、その２０年後の「限界を超えて」においては、「資源の消費、汚染物質の排出速度は、多くの場合すでに持続可能な速度を超えてしまった」とした上で、それを改善するためには「生産量や技術力以上のもの、つまり、成熟、哀れみの心、知恵といった要素が要求される」と述べている。

この場合の「哀れみ」という言葉の正確な意味はどういうことなのだろうか。その著書からその意味するところを探ってみると、「忍耐強く」「新たな世界から、いかなる人間をも締め出さず」「自分自身や他者を同情心をもって見る」というようなことであろうか。つまり、地球的なパートナーシップの必要性を訴えているのであろう。

このことと、本編に述べたことを直接結びつけるつもりはないが、少なくとも、私たちは、資源回収を支えてきた人々を否定するようなことはするべきではないと思うし、弱者や社会からドロップアウトした人達を排除するようなこともするべきではないと思う。資源回収に熱中するあまりに、そういう大切な心情まで失ってしまったら、やはり、それは地球によろしくないのではないだろうか。

少なくとも、とりあえずは、せめて、クラクション１回、そして徐行してその脇を通り過ぎていくというような社会ではありたいと思うのである。

アパッチ

１９５０年代大阪に実在した屑鉄泥棒アパッチ族がその起源とされる。１９４５年８月１４日、終戦のちょうど一日前に、大阪城近く東区杉山町にあるアジア最大といわれた兵器工場大阪陸軍造兵廠（しょう）がＢ２９の猛爆を受けて壊滅した。戦後、アメリカによって使用可能な兵器や資材が搬出されたが、１９５２年にその廃墟全体が返還され国有財産になった時も三万台もの機械が残存していたという。この廃墟跡の屑鉄の商品価値に目をつけたのが、その周辺にバラック小屋を建てて住み着くようになった８００人前後の者達。朝鮮人を中心とするが人種の別なく、前科者や浮浪者、失業者、密入国者等だったという。彼らは「アパッチ族」と呼ばれ、「神出鬼没、官憲の取り締まりをものともせず、警備の目をかすめ、ときにははなばなしい乱闘を演じ、あくことなくこの廃墟を襲った[②]」

「アパッチ族」という名は、当時のマスコミの命名で、「当時洋画ファンを熱狂させていた西部劇の中のジェロニモを酋長とする神出鬼没の勇猛果敢なアパッチ族と夜陰にまぎれて鉄塊をかっさらっていく朝鮮人集落の者たちとをオーバーラップさせて書き立てた[③]」もの。

その後も、廃棄物処理業界では、粗大ゴミ集積所等から有価物のみを抜き取っていく者たちを「アパッチ」と呼び、集積所を汚す存在として忌み嫌っていた。

（参考資料）①開高健：日本三文オペラ、新潮文庫、１９７１年
（初出は、文藝春秋社、１９５９年）
②小松左京：日本アパッチ族、光文社文庫、１９９９年
（初出は１９６４年、カッパノベルズ）
③梁石日：夜を賭けて、日本放送出版協会、１９９４年

チリ紙交換物語

○「ご町内の皆様、毎度お馴染みのチリ紙交換でございます。ご家庭でご不要となりました古新聞・古雑誌などございませんでしょうか、ございましたらトイレットペーパー、化粧紙と交換いたします」（ｐ７）

○１９７０年代の後半から８０年代、スポーツ新聞の求人欄にはチリ紙交換募集の公告が多く出ていました。ほとんどが頭に「チリ」と表示された三行広告でした。

チリ交は

「相場急上昇　金になります　寮完備　○○紙業」

「日払い１万円確実　個室有　○○興商」

「宿無しよ来たれ　即日入寮可　○○紙材」

といった広告をみて、チリ紙交換に応募してきたのです。

広告には必ず「寮完備」の文句がうたってありました。（略）不都合が生じて、宿賃が工面できない人達にとって、「寮完備」、「即日入寮可」という文句は魅力があったのです。（P37 ～ 38）

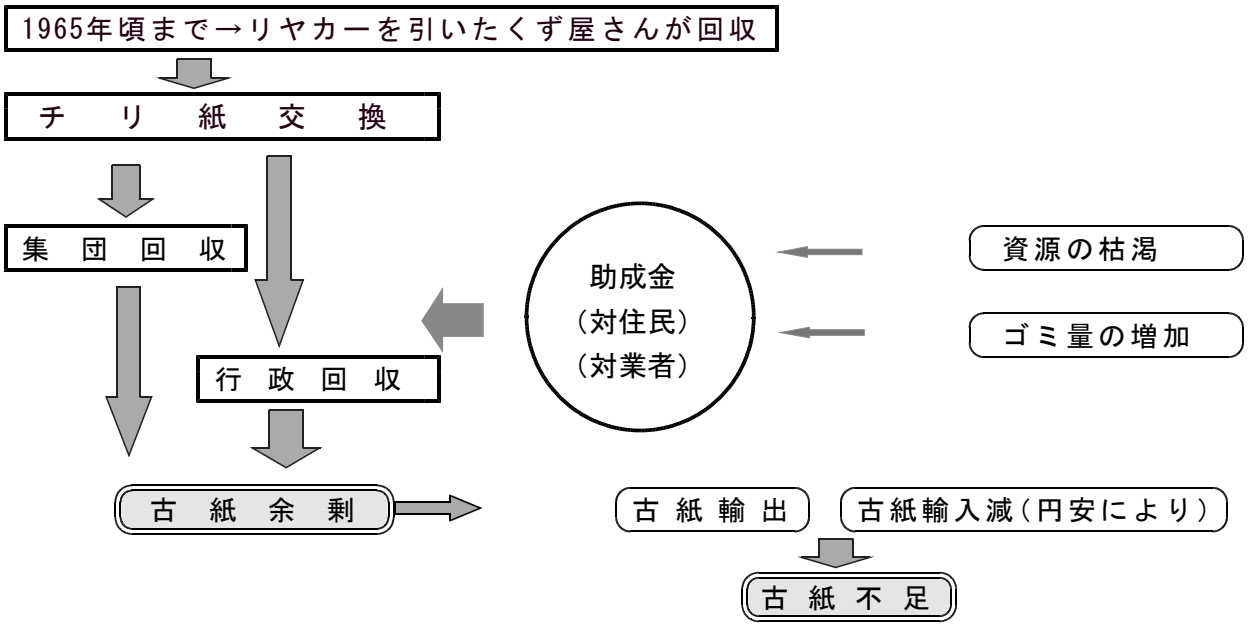
○１９９０年に入るとチリ紙交換にかげりがみえはじめました。１９８６年から始まったバブル景気に消費された莫大な紙が回収された結果、製紙の故紙需要を供給が大幅に上回ったのです。需給のバランスで決まる古紙価格は供給過多により、あってなきがごとくの価格になってしまったのです。（略）

新聞社回収や町内回収といった集団回収もチリ交に壊滅的な打撃をあたえました。新聞社回収は新聞専売所の読者サービス、読者獲得のための拡販材料といったことでしたし、町内回収は自治体のゴミ問題解決のためのボランティア活動（回収団体には自治体からキロあたりの補助金が出た）でしたから、極端にいえば古新聞、古雑誌の価格などどうでもよかったのです。（略）

チリ交は組織の一員でやっていくとか、時間の制約のなかで行動することが不得手、下手な人達でしたから、組織だて、決められた時間のなかでやらなければならない集団回収といったものには、ついていけなかったのです。（略）

チリ紙交換は草創から消滅まで約３０年をようしました。とどのつまり社会が必要としなくなったチリ紙交換は自然消滅し、チリ交もいなくなりました。（P169~171）

＊「伊藤昭久、チリ交列伝（論創社）、2001.5」から引用（括弧内は同書内の掲載ページ）



集団回収：学校、町内会、婦人会、子供会、老人会等の団体が回収業者と契約し、回収日を決め、各家庭の協力を得て古紙等を回収するもの。多くの場合、登録制度や報告書の提出制度等を設け助成金の交付や表彰等を行っている。

行政回収：自治体が一般ゴミと分別して、資源化できる有価物の回収を行うもの。多くの場合、一般ゴミとは異なる曜日に自治体指定の回収業者が回収する。

図表　　古紙余剰から古紙不足へ

（参考資料）④泥谷直大：古紙利用の歴史、（財）古紙再生促進センター会報、2002.7
⑤中村正子：持続的な古紙リサイクルシステムの構築を！、月刊廃棄物、2004-5
⑥羽生和紀ら：複雑現象を量る（紙リサイクル調査）、朝倉書店、2001.9

２．誰も相手の気持ちを理解できない
－コミュニケーションの作法を失った国民－

人と人の関係が崩れ去った５年間

平成９年１月に策定された「ごみ処理に係るダイオキシン類発生防止等ガイドライン」においてダイオキシン類の排出基準が提示され、さらに同年５月に主にダイオキシン類の排出削減を目的とした広域化計画の策定が都道府県に指示された。以降、ダイオキシン類に係る新規制値が適用された平成１４年１２月までの約５年間は、ゴミ焼却施設の建設ラッシュが全国的に続いた。それはまた、行政と住民あるいは住民と住民同士が激しくいがみ合った５年間でもあった。

工事車の搬入を阻止するために用地の入り口に身を横たえる人、それを数人がかりで排除しようとする人々、そういった光景がたびたびテレビで放映された。ある地域では、自治会が建設反対派と賛成派に分かれ、同じ家でも親と子では所属している自治会が異なる所もできたという。また、ある地域では、先祖代々の土地を建設用地として売る売らないで兄弟同士が激しく対立し、一方は自分の譲り受けた土地を手放したのに、一方は頑として譲らず、結局用地の一部にポッカリと空白部分を残したまま建設が進んだ。そして、建設も半ばを過ぎた頃、土地を売った方が亡くなった。喧嘩したまま兄弟に先立たれてしまった方は、そのことを激しく悔いて「供養のために」と遂に土地を手放したという。このことを話してくれた自治体の担当者は、「ちょうどこのあたりでしたよ」と、その一角を指さしながら、心なしか涙ぐんでいるように見えた。

このような反対運動のいくつかは裁判になり、団結小屋が建てられるような激しい争いに発展していったが、多くの場合、そのような反目の中でも、建設工事は着々と進み、予定どおり完成した。次第に表立った反対運動は終息し、そして、いつの間にか団結小屋は作られた人たちの手で撤収され、とてもゴミ焼却場とは思えないような豪奢な建物が道行く人々の目を奪った。そして、一年もしないうちに、多くの人々は、そのような反対運動があったことすら忘れてしまう。しかし、おそらく、一部の住民の行政不信と、住民間の埋めることのできない反目は、消し去ることのできない傷としてこの先長い間続くことだろう。

戦いの技術が存在するということ

NIMBY *の対象となる施設の御三家といえば、原子力発電所、軍事基地、そして廃棄物処理施設といったところだろうか。墓地もちょっと困るし、火葬場もやはり近くにあると嫌な施設だろう。暴力団の事務所も遠慮したいし、怪しげな宗教団体も困る。年頃の子供をかかえたお母さんならば、風俗店やモーテルも迷惑だろう。

＊ NIMBY（Not In My Back Yard）:「自分の裏庭にはノー」、必要性は理解できるが、自分の家の近くに持ってこられるのは嫌。総論賛成、各論反対。住民エゴと訳されることもある。

いくつかのアンケート調査によると、ゴミ焼却施設の場合は、賛成・反対半々。「とにかく反対」という人と、積極的に賛成するわけではないだろろうが、「まあ、やむを得ない」という人が半数ずつ。

５０対５０の攻防であるから、「説得のための技術」あるいは逆に「戦いのための技術」

が存在する。

たとえば、環境省の「自治体のための化学物質に関するリスクコミュニケーションマニュアル」では、主催者用のチェックシートとして以下の７点をあげている。

①資料を作成する際に相手の理解度・関心を考慮した

伝えたいことを相手の理解できる言葉で簡潔に記することが必要。また、一方的に伝えたいことのみを記するのではなく、参加者が知りたいと思っていることについても記す。

②会合の目的・趣旨を理解している

相手は会合の趣旨・目的にそった対話を期待しているので、会話のいきちがいがないように、念のため目的・趣旨を事前に確認しておく。

③相手の理解・関心にあわせて話をするように心がける

難しい言葉などでごまかしているのではないかとの誤解を避ける。また、関心のある問題についての話ができれば、コミュニケーションが活発になる。

④正直、率直、オープンに話し合うように心がける

情報を出し渋ったり、参加者からの質問をはぐらかしたりすると、不信を招くことがある。

⑤相手をパートナーとして受け入れるよう心がける

参加者からの意見を真摯に受け止め、協働して地域の環境を改善するという考え方で対応。

⑥情報を一方的に出すだけではなく、相手の言うことを聞くよう心がける

単なる情報提供や意見公募ではなく、相互理解を深めるために双方向のコミュニケーションを行う。

⑦不利な情報も隠さず、偏らないように分かりやすく説明するように心がける

提供する情報に偏りがあると、参加者はそれを感じ取り大きな不信感を抱く。一見不利と思われる情報でもできる限り速やかに公表する。

‥‥‥とまあ、納得はできるのだが、これを冷静にやり遂げるのは神の技と言ってもいいかもしれない。もう少し具体的で戦術的な注意事項を示した論文もある。たとえば、

①情報の出し方によって相手に与えるインパクトが異なる（先に接した情報ほどインパクトを持つ。「暴かれた情報」は「公表された情報」よりもインパクトを持つ）

②マイナス情報はプラス情報よりもインパクトを持つ。

③相手の理論がたとえ非科学的であっても、相手の意見を受け止める姿勢を保つ。

④大きなマスメディアの情報は信頼できるという思い違い

⑤学者は、客観的にリスクを判断しているという思い違い

⑥人々は論理的会話より自分の知っている人が賛成しているかによって判断する傾向がある。（環境問題に関心の高いオピニオンリーダーと対話し、理解してもらうことが大切）

一方、反対運動を進めるためのマニュアル本もいくつか存在する。それらには、たとえば、

①住民グループの作り方（人を集めるテクニック、ビラの使い方）

②情報の集め方

③説明会の開催手法（机の配置から発言に際しての注意事項）

④運動資金の集め方

⑤広報活動の方法

⑥マスコミや議員、上級官庁との接触のあり方

等々が詳しく記載されている。

反対運動が退っ引きならない状態になると、それを指導することを半ば職業にする人達の出番になる。見聞きしたところによると、指導の手順は次のようになるという。

①まずは署名運動をする。署名は実質的な効果はないが、数を集めることによってプレッシャーを与えることができる。

②説明会を開催させる。基本姿勢は、「話を聞く」「質問に答えて下さい」「安全である根拠を示してくれるなら賛成します」という姿勢。しかし、それを説明できた事例はない。

③意見書を頻繁に提出する。意見書にしても署名にしても数を集めることが大切。当局は反対者は少数で、跳ねっ返り連中だけだという宣伝をしたがるだろうから、こちらも反対者が多数であるという宣伝が必要。

④県や国に頻繁に行く。国は、表面上は「ゴミの処理は法的には市町村の固有事務なのだから、こちらに言われても困る」とはいうが、実は裏で都道府県を叱る。叱られた都道府県は市町村を叱る。それは当局にとってプレッシャーになる。

かくして、攻める反対派と守る行政という形ができあがる。

守る人達の手法は、概ね変化がない。慎重に、刺激せず、揚げ足取られず、質疑マニュアルを作って‥‥‥と、決まり切ったものしか手がない。しかし、攻める側の手法は、（これは戦争であるのだから）、千差万別、手が込んでいる。たとえば、人員配置。「集会全体の雰囲気をリードする実行隊長（全共闘あがりの猛者とか組合の執行部経験者が望ましい）」やら「理論部隊（高校や大学の理系の教師が望ましい）」やら「心情に訴える情感隊」やら「関連話題でその場の熱気を保ち続ける場繋ぎ隊」やら「雰囲気盛り上げ拍手隊」等々、役割分担も決まっている。

こういう布陣で、さあ戦いということになるのだが、その前に、行政側の最大のウィークポイントである「ゴミ焼却施設の安全性」は実際のところはどうなのだろうか。あるいはまた、適地選定の手法は本当に公平なのだろうか。

ごみ焼却場であれ何であれ、そこに新しい施設ができた場合、何らかのリスクが生じないということはない。ごみ焼却場に係る詳細なリスク論は別の機会に譲るとして、ザクッとしたところでゴミ焼却施設の安全性について表現すれば、「事故やトラブルは皆無ではない、しかし、周辺環境に影響を与えるようなレベルの環境問題が起こることは極めて考え難い」ということになろうか。そして、内心では、「これだけ車が溢れ、天災地変も多い中で、ゴミ焼却場の持つリスクなんて取るに足らないものではないか。ほら、たばこを吸ってるそこのオッサン、あんたの存在の方がよっぽど危ないんだよ」と口には出せないまでも、そんなところが正直な気持ちであろうか。

そして、用地選びの公平性。

昔は、とはいっても、ほんの十年ほど前までは、地域の首長あるいは男気に富んだ担当部課の部長さん課長さんが、これはと目を付けた用地の地権者に直接乗り込んで話を付け、ついでに地域の有力者やら議員さんやらに根回しし、ごく穏やかに用地が決定したものだが、最近はとてもそんな手法では解決できない。というのも、建設反対のドーナツ現象。上手い具合に地権者並びにその近辺にあたりを付けたとしても、反対するのはその周囲３キロから４キロ先の人々が多い。ダイオキシン類問題やら不法投棄問題やらで人々の関心

が高まり、多くの人々が敏感に反応する。何故、その場所が選ばれたのか、きちんとした根拠が要求される。

一般的に、最近の用地選定の方法は、まずは国立公園や自然保護地域である場合は、初めから用地としての可能性がないので外す。特殊な遺跡がある場合も困る。こういった、建設が困難な地域は初めから外しておく。そして、そういう制約条件を次第に厳しくして、最後には「より環境負荷が低い地域」「収集経費の低い地域」というような比較検討を行って客観的・科学的な視点から決定していくということになる。

とは言っても、せいぜい数万平方メートルの用地である。そういう塗りつぶしをしていっても、適地となりうる場所がたった一つしかないということにはならない。複数残った候補地から１箇所を決めるという、はなはだ難しい作業が必要になる。理想を言えば、使い道のない用地を持っていて、それを売りたがっている人がいて、その場所は該当地域の中央近くにあって、付近に民家が少ないというようなところ。たまたま、そんなところが見つかれば、知らず知らずのうちに、そちらに視線が移って行ったとしても不思議ではない。そういう場合、行政としては、ちょっとした屈託（１００％科学的ではないという）を抱えながら、説明会に臨むことになる。

さながら戦争のような

戦争の開始は、まず主導権をどちらが取るかということから始まる。行政が主催する説明会であるから行政が進行を努めるということは当然のことであろうが、それでは、結末が目に見えている。延々と時間の大半を事業概要の説明に当て、質問はほんの僅か。ひょっとしたら、サクラの質問者がいて、そちらを重点的に指名し、「さぁ、時間ですので、本日はこれまで」とやられたのでは、たまったものではない。逆に、反対派が進行を握ることになれば、これはもう糾弾集会になることは目に見えている。特に全共闘世代の行政側の部長さん課長さんは、自らも糾弾する立場を経験しているわけだから、なんとしてもそういう立場に陥ることは避けたい。丁々発止の駆け引きが行われるわけであるが、場合によってはこれだけで一回目の会合が終わってしまうことも少なくない。

ともあれ、どちらになろうとも、みんな言いたいことを言いましょう、行政は必死の防戦に努めましょうという戦争が遅かれ早かれ始まることになる。

以下、論点を分かりやすくするために、立場の違いをはっきりわけて、それぞれの主張をまとめてみることとする。（括弧内斜線の呟きはヤジ、無言の反論、冷やかしという、そういった類のものだと読み過ごしていただきたい）

実行隊長：（この人の演説は長い！従って要旨のみ）「行政側執行部の不誠実。密室で決定したことを、市民に押しつけるだけ。ここが選ばれた理由も明確に説明できない。ゴミ焼却場は、人間を長い年月をかけていたぶり殺す殺人マシーンだ。そんなものを、密室の協議で一方的に押しつけられるのは、ごめんだ。せっかくの機会であるから、私たちの生の声を行政側はしっかり聞いてもらいたい」

情感部隊：「先祖代々続いたこの美しい地にゴミ焼き場ができることを、今は亡き父母が聞いたらどう思うことだろう」

「有害物質を含む灰が降ってきて、子供達は喘息やアトピーになり、大人達はガンで死んでしまう。小鳥たちはどこかへ行ってしまい、蛍も川から消え去って、私たちの故郷は墓場のような廃墟と化してしまうのです」

「ダイオキシンが怖くて思い切り外で遊べないし、犬と散歩ができなくなる」

「僕は９才だけれど、ダイオキシンで寿命が縮まると思うので絶対持ってこないで！」*（誰だ、こんな教育をしたのは）*

「この地区はぜんそくとアトピーの子がすごく多いんです。だから、娘も言っているんですけれど、子供の少ない違う所に持っていってください」

（繰り返し、誰だ、こんな教育をしたのは）

「分別収集を徹底すれば、ゴミはなくなるんです。私たち、みんな協力して、ゴミを減らすから焼却場を建てないで！」

場繋ぎ隊：「ゴミ焼却施設なんかできると、みんなこの地区を嫌って、地域の人口が増えない。寂れる一方だ」

「全戸に浄水器と清浄機を設置したらどうだろうか？」

「ワシはほうれん草は嫌いだからいいけれど、朝昼晩、お茶を飲まないと生きていけないから、ダイオキシン汚染で死んでしまうぞ」

（合っているようで間違っているぞ、その聞きかじり）

理論部隊：「行政はもともと嘘をつくように訓練された人達なのだから、情報の隠蔽、計画の変更など当たり前。いつの間にか産廃も処理するようになる」

「廃棄物焼却施設は技術的欠陥物なのだから、遅かれ早かれ必ず周辺環境を悪化させる。もし、安全だというのなら、市役所の隣か、市長の家の隣に作ればいいんだ」

「廃棄物処理施設を作って誰が得するか考えたことがありますか？　造船会社や製鉄会社など大企業なんですよ。彼らの利益のために、私たちの大切な税金が使われるのだから、反対することは税金の無駄使いを防ぐための正義の戦いなんですよ。決して地域エゴなんかじゃありませんよ」

（拍手、そうだ！　そのとおり！　市長は大企業の手先だ！パチ、パチ、パチ、パチ）

「実はね、みなさん。噂ではネ、ここだけの話ですよ。*（聞こえてるぞぉ）*　コンサルが問題なんですよ。この事業のコンサルは、あるメーカーと癒着してるってらしいですよ。私が調べた限りでは、この５年間で、同じ組合せが４件もあるんですよ。いいんですか、こんなことで」

（市長～、なんか言えよ）

迷い住民：「あのぉ、私も、反対なんですけど、でも、ゴミ焼却場は、必要な施設だと思うんですよね。で、私たちが反対したら、ゴミ処理はどうなるんですか？」

理論部隊：「そんなこと、気にしなくたっていいんだよ。我々が反対したら、どこか違う所に持っていく。そこに住んでいる人達もダイオキシンで死にたくなかったら、反対すればいい。みんなが反対すれば、みんなが真剣にゴミ問題を考えるようになって、そうすれば、ゴミはなくなるんですよ。焼却施設があるから、みん

ながが真剣にゴミ問題を考えないんです*（きっぱり）*」

迷い住民：「どうすれば、ゴミはなくなるんですか？」

理論部隊：「リサイクルですよ。２０分別も３０分別もして、ゴミをぜーんぶリサイクルしたらゴミ焼却施設はいらなくなるんです*（きっぱり）*」

迷い住民：「あの～、私も、わりと真面目に、そりゃ、みなさんに比べたら不足かも知れませんけれど、分別してるんですけれど、やっぱりゴミは出てくるんですよね。袋に１つじゃ足りないくらい出てくるんですよね。すみません、やり方が悪いのかもしれませんけど･････」

理論部隊：「いいですか、あなたが賛成するなら、ずーっと賛成してればいいんですよ。でもね、これだけは覚えておいてくださいよ。あなたが賛成して、あなたとあなたの家族がダイオキシンで死ぬのはかまいませんが、あなたの周りの人達もダイオキシンで死んでしまうのですよ。あなたは、間接的に殺人を犯すことになるんですよ。それだけは、ちゃーんと分かっておいて下さいよ」

長老住民：「ちょっと待ってくれよ。みんなダイオキシン、ダイオキシンっていうけれど、環境問題はそれだけじゃないんだよ。地球規模の問題なんですよ。こんな小さな地域でゴミ焼却場がどうのと言い争っても意味がないのじゃないないですか。だいたいね、今日、ここに来るまでに車で来た人。たくさんいるでしょう。その人が、何を言っておるんだね。それに、たばこを吸う人。あんた達に、この件で発言する権利があるのかね。だいたいね、日本は平均寿命が世界一って聞くけれど、それでもまだ、命、命って主張するのは贅沢だと･･････」

（なに言ってんだ～、あんたはもういいだろうが、子供が問題なんだよ～、ひっこめー）

「まぁ、ちゃんと人の話を聞きなさい。いいですか、私たちは、この長い地球の歴史の中で、たった百年で石油資源を浪費してしまったんですよ。問題にするべきは、そちらの方じゃないですか。だいたいねぇ、私はいつも言っているのだが、今は２００４年ということになっているが、この西暦という表記方法が間違っている。もちろん元号なんて論外で、たかだか一宗教の節目を基準にするのはおぞましいし、そんなことだから地球という視点でものを考えれない。たとえば最後の氷河期が終わった１万年前を元年とするとかだな･････」

（ガァー、ガァー、･････マイクが持ち去られる）

実行隊長：「執行部は、先ほどから、安全だと力説しているけれど、もし異常が生じたら誰が責任を取るのか。市長ですか？部長さんですか？課長さんですか？　あなた達はその時まで生きているのか？　損害賠償をするとしたら、それは税金ではなくて、もちろん、あなた達の個人の財を投げ打って補償するのでしょうね？」

「聞くところによると、地元に迷惑料を払っているということだが、それは本当か。いくらなのか？　まさか、それは税金じゃないでしょうな？　もちろん、市長のポケットマネーだと思うんだけれど、どうなんですか」

（地元に迷惑をかけるわけだから還元施設を作る予定ではあるが、迷惑料は支払っていないし、その予定もない、と執行部）

場繋ぎ隊：「迷惑料を払うなら、反対住民全員に払うべきじゃないの？」

実行隊長：「地権者がいたら聞きたいのだが、あの建設用地はいくらで手に入れて、いくらで市に売ったのか、ちゃんとした数値を示してもらいたい。市はきちんと情報公開してもらいたい」

「今、こうして聞いていると、圧倒的に反対意見が多いことが分かって、安心したところです。地元の人達も目先のおいしい話に乗らずダイオキシン問題を初めとする環境問題にもっと関心を持って欲しい。一つ、みなさんに提案ですが、まだまだ十分に理解していない人も多いので、チームを組んで、そういう人達を啓蒙していこうではありませんか」

理論部隊：「みんな一斉に反対しないから、執行部に舐められるんだ。啓蒙とか生ぬるいことを言わずに、一軒一軒、全員が押しかけていって、分からせてやらなくちゃいけないのじゃないか」

「いや、ここに呼んで、話して聞かせれば、ちゃんと分かるはずだから、次回は全員を集めるということにしたらどうか」

（いいぞ、そのとおり！）

誰も相手の気持ちが分からない

多くの人たちは忘れていることかもしれないが、公務員になろうとする人の多くは、「人々のために何かをなしたい」という使命感に充ちた人が多いのだ。自分のためにというのではない、他人のためにという意識が強い人達が多い。安定収入、終身雇用ということだけで、この職を選ぶ人達というはさほど多くない。

ある住民説明会の会場で、３０才をちょっと過ぎた行政側の担当者が、小学校か中学校時代の同級生だったと思われる女性から、「○○君、あんたは、そんな人じゃなかったよ、そんな悪いことを平気でやる子じゃなかった。上司のいいなりになってばかりいないで、私たちの立場に立って考えてよ」と大声で罵られているのを目撃したことがある。しかし、彼女は間違えている。彼は、心の底から、今、自分のやろうとしていることが正義だと信じているのだ。おそらく、あと少し年を重ねれば、苦笑一つで忘れる術を身につけることが出来るのだろうが、あの時の彼は深く傷ついたことだろうと思う。

また、よくある行政罵りのパターンに、「役場の隣りに作ればいいのだよ」というのがあるが、それはナンセンスである。多くの公務員は、ゴミ焼却場を職場の隣に建設することに、なんら躊躇を感じていない。ただ、多くの場合、役場の隣が客観的に適地として選択されないというだけのことだ。

しかし、逆に正義感に駆られた行政側の担当者には、住民側の感情的な痛みが見えにくいということも事実だろう。

先祖代々の土地を汚されるという意識を持つ人もいるだろうし、せっかくローンで手に入れた新居の窓からゴミ焼却場の煙突が見えるのは絵柄としてみれば楽しくない。

「何故、ここに」ということに客観的な根拠を持って答えることはある程度は可能だろうが、その感情を共有することは、当事者以外には不可能だ。

また、反対する人も、感情的に許せないということはあってしかるべきだが、建設を容認する人を村八分にするような発言はあってはいけないことだろうし、たとえば、「ここ

にゴミ焼却場を作らないでください。よそに作ってください」と幼い子供に言わせるのは、教育上よろしくないことだろうが、自らの感情を具体化するためにそういう手段しか思い浮かばないのならば、それもやむを得ないだろう。

これは戦争であるから、誰も相手のことを理解する必要も、思いやる必要もない。

客観的に正しいかどうかは別として、大義を持たない戦争はない。行政側は、任務に忠実に執行するべきであろうし、突然嫌忌施設を押しつけられた住民は誰かを思んばかるよりもまず自らの不快感を思い切りぶつけ勝利を目指すべきなのだろう。それは、戦争なのだから、躊躇していては負けになる。

大切なことは、戦争を起こさない知恵だ。

「腹一杯」と「腹を割る」ということ

ありがたいことに、ゴミ焼却施設の立地をめぐる戦争は、人と人の心を傷つけ合う戦争ではあっても、人の命を奪う戦争ではない。ならば、この戦争を経験することによって、私たち自身のコミュニケーションを確保する訓練の場にすることは可能なのではないか。

戦争には、最初に攻める側と攻められる側が存在するが、ゴミ戦争の場合は、立地交渉を持ち込む自治体の方が最初に攻める側となる。従って、戦争を回避するための努力と工夫は、まず自治体の方から始めるべきであろう。

腹一杯の不満‥‥‥行政側として立地交渉を経験した方の論文[①]によると、まずは腹一杯の不満を言ってもらうことから始めるべきだという。ゴミ処理施設が身近に出来て嬉しい人は、まず、いない。誰だって面白くない。たとえ、それが、客観的な手法で選ばれた場所であったにしろ、結果として、そこに住む人にとっては公平なことではない。不公平だ。腹一杯文句を言いたい。おまけに、たとえば、その地区に１００人の人がいれば少なくとも何人かは過去に行政に対する不満や恨みつらみを持った経験がある人がいるはずだ。まずは、そういう人に、過去も未来も合わせて、腹一杯の不満をぶちまけてもらわないことには話が前に進まない。＜マイナスをゼロに戻す＞ことから始めるべきだという。

＜腹一杯の文句を言う＞ことと＜腹一杯の文句を言われる＞ことと、どちらが難しいことだろうか。焦って口籠もることなく、舌を噛むこともなく、手も振るわせることもなく、机を叩くこともなく、冷静に筋道たてて自己主張し、その結果、とりあえず気持ちをゼロに戻すということはとても難しいことだと思う。あるいは、自分は別に腹黒いことをしているわけではなく、任務に忠実に、いや、この町の廃棄物対策を円滑に推進するために頑張って、ユンケルを３００円のものからから５００円のものに、そして１０００円、２０００円と、日々値段を高いものに変えながら頑張っているのに、何故に税金泥棒だと言われなくてはならないのだと腹立つこともなく、きちんと相手の言い分を腹に収めることは、とても難しいことだ。

そして、その通過儀式が終わったら、次は、腹を割って話す。

しかし、そもそも、私たちは、コミュニケーションの作法といったものを持ち合わせているのだろうか。互いにリスペクトする気持ちを維持したまま、率直に話し、真摯に聞くという、そういう技術を習得しているのだろうか。もともと私たち日本人にはディベートという習慣がないから、追いつめられるぎりぎりまで喋らずに、やっと口を開いた時は、いわゆるキレている時、ということはよく経験することだ。そして、そういうコミュニケ

ーション能力は時代とともに後退しているのではないだろうか。
それは一人楽しむコンピューターゲームのせいかもしれないし、自動販売機やスーパーマーケットが原因なのかもしれないし、駅の自動改札機、あるいはワンマンバスの降車ボタンがいけなかったのかもしれない。いずれにしても、最近の私たちは会話に慣れていない。
電車の中で、携帯電話で他愛のない話に熱中している娘達、やはり電車の中で化粧に熱中している娘達を目にするたびに、絶望的な気持ちにさせられる。あれだけ大胆に、目の前にいる人達を無視できる能力というのはすごいと思う。今更、腹を割って、腹一杯話そうよと言っても、それは手遅れというものだ。
若者だけではない、たとえば、その昔「新人類」と言われた人達。一応、１９５９年から１９６４年生まれということになっているようなので、今４０代半ばといったところだろうか、この人達の協調性のなさときたら、ホントにまあ、うんざりしますね‥‥‥と思っている方は結構多いのではないだろうか。しかし、かくいう私、団塊の世代も、角材持った問答無用の全共闘世代だから、コミュニケーションが得意なわけがない。かといって、その上の世代がすごいかというと、ただのワンマンですよね、民主主義っていうものに慣れていませんよね。勝手に決めて、それを押しつけようとするのだけれど、その根回しの下手なこと‥‥‥結局は、私たち日本人は、上から下まで、コミュニケーションを失った、あるいは持っていない国民なのだと思う。
それが、我が国民だけの問題なのか、人類全体の問題なのかは知らないが、こんなことでいいわけがない。
腹を割って話すということはどういうことだろうか。おそらく、まずは気持ちのしこりを柔らかくすることが最低限のゼロからの出発になるのだろう。ゴミ焼却施設がこの地に存在するという＜不快感がいつか和らぐ可能性があるのかどうか＞という自己問いかけを、たとえば、１ヶ月おきに１０回、「だめ」という前提ではなく、心を空にしてやってみる。なにしろ、５０対５０の攻防なのだから、「だめ」という前提から始めるような内容ではない。そういう、自身の感情を眺める作業の中で、許せそうだという隙間が見えそうだと思ったら、それがどういう形であるかというイメージトレーニングを行う。
もちろん、その都度、行政側や隣人・知人と話しながら、自身の意見を形にしていく作業を行う。行政は、その声と意見を真摯に聞き、それをどのような形にしたら、ゼロをプラスにすることができるかという検討を行う。それは、公務員としてのプロの仕事になるのだろう。
全体としては、そういう作業を根気よく続けながら、妥協点を見いだせるかどうかの会話、つまりコミュニケーションの階段を上っていくということが必要なのだと思う。そして、そのことによって、腹を割った会話が可能になるのだと思う。
それは、とても困難な作業ではあるのだろうが、やはり、私たちはそういう形に少しずつでも慣れていくことが必要なのだと思う。そういうことが出来ている国があるのかどうかも知らないし、ずっと昔、そういうことができた時代があったのかどうかも知らないが、出来るようにならなければいけないことなのだろう。
とりあえずは、家の近くにゴミ処理施設を建設したいという＜事件＞が起こったら、「しめた！」と、

「コミュニケーションの訓練ができるのだ！」と、
喜んでいただきたいとは思うのである。

参考文献：①秦泰之、廃棄物と環境、廃棄物戦略セミナー講演資料、H15.3、

図表２－１　　家の近くに清掃工場ができたら？

昭和６３年調査

Ｑ：もし自分の家の近くに清掃工場やゴミの埋立地が建設されることになったらどうしますか？

賛成する	3.2	44.4
条件によって賛成する	41.2	
反対する	47.5	
その他	0.1	
わからない	8.0	

（%）

反対理由

悪臭などの公害の発生が心配	78.5
ゴミを運ぶ車がたくさん通るようになる	39.2
イメージが悪い	21.0
他にも建設できる場所がある	20.0
周辺住民に利益がない	5.8
地価が下がる	2.8
現在、既に家の近くにある	1.3
その他	1.0
特に理由はない	1.5
わからない	1.1

（複数回答）　（%）

出典）「ゴミ処理に関する世論調査」、総理府広報室、昭和 63 年 10 月調査

平成９年調査

Ｑ：もし仮に、あなたの住んでいる市町村に無公害で、排熱利用施設を兼ねたゴミ焼却場ができることになったら、あなたは賛成しますか、反対しますか。

賛成	46.6
反対	40.7
わからない	12.6

（%）

反対理由

無公害といってもやはり不安だから	62.0
万一の事故がこわいから	12.4
ゴミ収集車が頻繁に通り、交通量が増えるから	8.0
地域のイメージが悪くなるから	4.9
ゴミ焼却場ができても利益があまりないと思うから	0.7
他にもっと適当な場所があると思うから	10.4
その他	0.9
わからない	0.5

（１つ選択）　（%）

出典）「時事世論調査」、時事通信社、平成９年年 10 月調査

３．ライフスタイルのトレーニング

－リサイクルを通して何を学ぶのか、あるいは何を失うのか－

今、全国のゴミ集積所で、ゴミ出しのルールやマナーをめぐる小競り合いが頻繁に発生しているのではないだろうか。１０分別を越えるような収集体系になると、どうしても自治会の協力が必要になる。自治会の役員さんが中心になって、ゴミ集積所で分別指導にあたるということになるが、特に容器包装リサイクル法のうち、紙製容器包装やプラスチック製容器包装の分別は難しい。「それはこちら、いやあちら」というような小さなトラブルが、至る所で発生しているのではないだろうか。

もともと、ゴミというものは、人それぞれの生活の様式がはっきり現れるものであるから、なるべくなら他人には見られたくない。本来なら、黒い袋に入れて、人知れず処理したいものだ。それを透明の袋に入れて、何が入っているかしっかりチャックされるのは楽しくない。いくら情報公開の時代とはいえ、使用済み生理用品は勘弁してもらいたいだろうし、零点の試験結果だって対象外としてほしい。独身男性ならまだしも、ベテラン主婦がいる家庭が、「カップ麺の容器が多い家だこと」と評価されるのもナンだし、「ここん家（ち）は発泡酒専門か」という赤の他人のチラリもちょっと気になる。「汚れているから、もう少しきちんと洗ってから出してください」と隣近所の見知った人にいちいち指導されるのも楽しくない。

一方、指導する方だって、別に人のあら探しをするつもりはないが、決められたルールに沿ってみんな頑張りましょうと善意でやっていることなのに、嫌な顔をされてはたまらない。ボランティアで一生懸命勉強して、その結果の指導なのだ。

しかし、往々にして一生懸命頑張っている人は、頑張っていない人には優しくない。「もっと何とかならんものか」という表情がついつい顔に出てしまう。

誰でも納得するためには、＜分別をしなければいけない道理＞というものが必要だ。しかし、誰が見ても、上から見ても下から見ても右から見ても左から見ても、みんなが納得できる＜分別しなければいけない道理＞というのは存在しない。もちろん＜分別しなくてもよいという道理＞も存在しない。

だからこそ、分別をするべきかどうか、あるいは、どのように気持ちよく分別をしていくかということを考えることは、かっこうのライフスタイルのトレーニングになるのではないだろうか。

分別は、大量生産・大量消費を抑制できたか？

ちょっと前までは、わが国の分別パターンは、「燃えるゴミ」と「不燃ゴミ」の２種類か、せいぜい「粗大ゴミ」が追加されて３種類というところで、地域で違うことと言えば、「燃えるゴミ」が「燃やせるゴミ」になるか「可燃ゴミ」になるかという表記上の違いくらいだった。つまり、集めた後の処理の方法に合わせた分別方法を採用していた。

しかし、このパターンはこの数年で大きく変化してきた。環境省の調査によると、11種類以上の分別数を採用している市町村は、平成 10 年度では 311 市町村であったのが平成 13 年度では 1212 市町村にまで増加している。ちょっと異常といってもいいような伸びである。

市町村による収集がサービス事業であるとするならば、分別数は少なければ少ないほど住民にとっては＜よいサービス＞ということになるが、サービスを犠牲にしてまで多種分別にこだわるのは、

・リサイクルということを視野に置いた場合には、資源化物の性状を高品位に保つことができるし、処理エネルギーや処理コストの面からも排出源で分別する方が効率的であること。

・分別をする過程を通じて、ゴミ問題を考えるきっかけになること。

ということであろうが、さて、ゴミ問題を考えたことによって、大量生産・大量消費・大量廃棄という現代社会の病弊を改善することが出来たのであろうか。

同じく環境省の調査には、分別数毎のゴミ排出量（１人１日あたり排出量）も示されているが、これを横にザーッと眺めてみると、確かに分別数が多くなるほどゴミ排出量が少なくなる傾向はあるような気はするが、「それは誤差範囲のようでもある」という程度のもので、期待されたほどではないということは言えるだろう。この数値には、リサイクルされた量も含まれているので、廃棄処理された量あるいは最終処分された量という観点から比較してみると、おそらく、もう少し大きな差異が見えてくるだろうが、結局のところ、「分別数を多くすることによって、大量廃棄は抑制することは出来るかも知れないが、大量生産・大量消費を抑制することはできない」ということに止まるのではないか。

生産・消費というおおもとのところを抑制できないシステムなのに、住民サービスを無視してまで実施していいのだろうかという議論があってもおかしくはないだろうし、あるいは廃棄物量を抑えることができるだけでも実施する価値はあるという考え方があってもいい。

ちょっと待った！リサイクル、という根拠

リサイクルは万能ではない、たとえば、･････ということを整理してみよう。しかし、これは、言うまでもなく、リサイクルをしてはいけないという致命的な根拠ではない。

① LCA の観点から環境負荷増大の可能性

物が生まれてから廃棄されるまでの環境負荷（LCA)という点から見ると、品目によっては、リサイクルすることによって、かえってエネルギー負荷、環境負荷が増す可能性がある。

②リサイクルコスト増大の可能性

リサイクル品目によっては、バージン原料を使用するよりコストが高くなる場合があったり、焼却処理をした方がトータルコストが安くなる場合がある。

③有害物質の循環、高濃度化の可能性

食品油をリサイクル利用した際に PCB が混入したとされるベルギー産食肉・鶏卵の PCB 汚染に見られるように、物の循環に伴う有害化学物質の循環濃縮が懸念されている。

④汚染源、病原菌伝達・循環の可能性

牛海綿状脳症（BSE）は、食用動物から食肉をとった後のくず肉等を利用した肉骨粉に含まれるプリオンが原因と言われているが、そのリサイクル利用によって BSE 病原体が伝達していったと考えられている。今後、食品リサイクル法の推進に伴う飼料リサイクルに際して同様の伝達・循環が発生することが懸念されている。

⑤リサイクル製品の供給過剰の可能性

食料の過半を輸入に依存しているわが国では、有機性資源の循環使用にあたっては、地域によって窒素やリンの過剰供給になる可能性が指摘されている。

ひきこもりゴミ

そんな具体的な問題よりも、もっと気分的なこと、「ちょっと、いやだよなぁ」ということも多い。

たとえば２０分別ということになると、記憶することすら難しい。あれはどちら、これはあちらと、考えているだけで、苛立ってくる。まあ、どうでもいいかという、割り切り過ぎるタイプの人は、適当に判断して、適当な袋に入れて、たまに「不純物が入っているので収集できません」とかメモを残されていても、「俺知らないよ」みたいな顔をできるのだろうが、ちょっと気の弱い人になると、「怒られたらどうしよう、しかし、いちいち調べるのも面倒だ」というわけで、ついつい後回し。結局、家の中は後回しになったゴミだらけということにもなりかねない。こういうのを「引きこもりゴミ」というのだろうなと思いつつ、しかし、インターネットでその町の分別方法を検索するほどのバイタリティーは湧いてこない。たまに、市役所のホームページで、品目別に分別方式を検索できるようになっている例もあるが、しっかり真面目に分別してくれる高齢者はパソコン操作に慣れていないし、逆にインターネットオタクの人達は、決して分別検索などという地味な作業に興味を示すことはない。

そして、考えてみれば、多種分別というのは、自治会の役員さんなど高齢者の善意・ボランティアに支えられて運営されているのに、実際の排出の手順とか手間・距離などを考えれば、高齢者には優しくないシステムということも出来るという、かなりはっきりした矛盾をかかえている。

しかし、その矛盾が致命的な矛盾かというと、そうではない、と思う。

生ゴミ処理機は有効か

家庭ゴミに含まれる容器包装は、容積比で約６０％を占めるということは、おそらくよく聞かされることだろうと思うが、統計上の数値は重量比で表されることが多いので、その場合は約２０％ということになる。容器包装は軽いのでそういう結果になるのだが、これではあまり説得力のある数値にはならない。あんなに頑張って分別しているのに、たった２０％ということになると、ちょっと考えてしまう。

統計上、「やったー」という充実感を与えてくれるのは、生ゴミのリサイクルである。なにしろ、たっぷり水分が含まれているから、嵩は少ないけれど重量では重い。約４０％が生ゴミ（厨芥）である。‥‥‥ということになると、やはり何とかしたくなる。

そういう観点から、生ゴミ処理機の普及が進んでいるのであるが、「家庭用食品リサイクル研究会報告」（農林水産省、2002）によると、電動生ゴミ処理機は他の処理方式に比べて、処理コストも消費エネルギーも圧倒的に分が悪い。つまり、電動生ゴミ処理機は決して地球には優しくない。

それなのに、日本電機工業会の調査によると平成１５年で約６５％の市町村が電動生ゴミ処理機に対する補助制度を設けているのだという。これが、結構値の張る品物だから、1/3 ～ 1/2 の補助で１台２万円から３万円も出している市町村が多いという。市町村にとっては、それでもゴミを減らしてもらえば、市町村の支出削減にはなるのだろうし、たとえば、

埋立地の残余容量が少ない市町村にとっては多少のエネルギーロスはやむを得ないと判断してもおかしいことではないだろう。しかし、６５％の市町村がこぞって導入するという程ありがたいシステムとは思えない。やはり、これも、ブームというか流れに押された挙げ句という感がなきにしもあらずだろう。「とりあえず、ゴミを減らせればいい」という発想がなかったわけではないだろう。

しかし、一方では、たとえば、埋立地を何処にも確保することができず、遠い地方の山奥に焼却灰の処理を委ねているような自治体の場合は、多少のエネルギーの損失には目をつむっても、ゴミを減らしましょうと考えることも間違いではないだろう。

そもそも、地球温暖化の主要な原因物質である二酸化炭素の排出源を見ると、＜廃棄物処理＞は、僅かに２％の寄与率である。その２％が、電動生ゴミ処理機を使うことによってほんの僅か増加したからといって、それがどうだというのだ、そんな小さなところばかり問題にするから、もっと大きい部門の対策がお座なりになるのだという意見があってもいいのではないか。

どちらを選択するかは、それぞれの考え方だと思う。どちらの選択があってもいい。問題は、結論を出し、ルールを決定するまでの経緯と、その合意形成のあり方だ。そういうことを考え議論していく形が身近にあることが、もっとも有効なライフスタイルのトレーニングになることなのだと思う。

ＰＥＴの奇跡

ペットボトルはすごいと思う。何がすごいかというと、大きく３つある。

一つは、なんといっても＜容器＞としての便利さ。ただの使い捨て容器じゃないんだぞという主張が際だっている。見た目もそこそこ美しいし、軽いし、割れない。なんと言っても、水筒もどきの機能を持っているのがいい。１度か２度、水筒としての機能を使っておけば、捨てる際にも心の痛みを軽減できる。

ペットボトルのすごいところの２番目は、中身と容器の立場を逆転させたということである。どんな商品でも、たとえば豆腐にしろ刺身にしろビールにしろお菓子にしろ、普通は中身の方が偉い。容器は中身を保護し保存するという本来の役割に加えて、せいぜい商品のイメージを高めるための工夫を施されるだけで、決して主役・脇役交代することはなかった。ペットボトルのすごいことは、中身の名前を奪うまでに存在感を高めたということだ。今、若い人達の間では、たとえば、ジュースを飲もうとするとき、「ジュース、飲もうか？」とは言わず、「ペットボトル、飲もうか」というのだそうだ。飲料容器の分際で、商品の名前まで奪ってしまうとは、あっぱれと言えばあっぱれだ。

ペットボトルのすごいところ３番目は、環境対策の完全な敗北を生んだということだ。ペットボトルの回収率の伸びはすさまじいばかりだ。平成８年度には僅か３％にも満たなかった回収率が、平成１５年度では６１％までにも伸びている。右肩上がりなどという表現ではとても収まりがつくことが出来ないような、天をも脅かすような鋭角な伸び方である。頑張ってリサイクルをしましたといえば、そうなのだろうが、空気を運ぶと言われるペットボトルのリサイクルに精を出すことがそれほど環境にやさしいとは思えない。＜リサイクルという名の免罪符＞ということがよく言われるが、ペットボトルはその典型であろう。リサイクルという＜善行＞が使い捨て容器の普及を促進してしまったということは否定できないし、それは、大量廃棄は抑制できたとしても、大量生産、大量消費という流れを止めることにはなっていない。しかし、もはや、ペットボトルの普及というこの流れを止めることはできないだろう。それは、つまり、環境対策の敗北ということである。

鞄の中身

吉行淳之介の本にそんなのがあったなあと思うのだが、どういう内容か思い出せない。Kinokuniya BookWeb を検索してみると、

＜自分の死体を鞄に詰めて持ち歩く男の話。びっしりついた茄子の実を、悉く穴に埋めてしまう女の話。得体の知れぬものを体の中に住みつかせた哀しく不気味な登場人物たち。その日常にひそむ不安・倦怠・死‥‥‥。＞

ちょっと苦手ですね。だから、たぶん、覚えていないのですね。

ここで言いたいのは、もっと現実的な話で、何で、私の鞄の中には携帯用の買い物袋が入っていないのだろうという疑問。Ａ４の書類を持ち運ぶ必要の無いときは、Ｂ５版の週刊誌がやっと入る程度の小さいバックを使っている。私の鞄の中身は、Ａ５版のシステム手帳、デジカメ、ＰＣカード、文庫本または新書本というところで、携帯用の買い物袋を入れておくスペースは十分に残っている。

何故、常時入れておかないかと考えるに、まず一つは適当な袋がないからということだと思う。スーパーやコンビニで買い物袋が売られているが、あれは本質的に車のダッシュボードに入れておくためのもので、鞄の中に常時携帯することを目的としたものではないと思う。あれを鞄の中に入れておくのはちょっと煩わしい。実は、私は既に３つの携帯用折り畳み袋を買い求めたが、結局いずれも気に入らず、たぶん彼らは押入の中のどこかで、いずれゴミになるべく待機しているはずだ。

入れておかない理由、その２。「たかがレジ袋」という気持ち、これは確かにあると思う。貯めておけば結構役に立つ。ゴミを出すときに、特に台所のゴミから汁が漏れないように二重に包むのに役立つし、出張の時に下着を包んでおくのに都合がいい、あるいは冷凍保存する食品を小分けするのにも役に立つ。こんなに役に立つのだから、まあいいのじゃないの、というのが現実なのだろう。

とはいえ、たとえば我が家の場合は、車の中には買い物袋を常備しているからスーパーマーケットではレジ袋をもらうことが少ないし、そして私自身出張が多く下着入れとして愛用してはいる（つまり一般の人よりはレジ袋の需要が多く供給が少ない）が、それでもなお、我が家でストック中のレジ袋はかなり余剰気味だ。

杉並区の調査*によると、「レジ袋を受け取る理由」として、「ゴミ袋などとして使用するため（35.5%）」「買い物袋を忘れてしまった（15.9%）」「仕事などの都合で買い物袋を持参できない（13.3%）」「店で渡されるから（10.1%）」「習慣になっている（7.5%）」というようなことがあげられているという。「ゴミ袋などとして使用する」を除けば、ほとんど理由にもならない理由ばかりが目につく。おそらく、「たかがレジ袋」という発想から来るものなのだろうと思う。　＊レジ袋削減運動等に関する認知度調査、杉並区、H16.1

その杉並区で、平成１４年３月に全国で初めてレジ袋税導入が可決された。レジ袋１枚に５円の税を課するものだが、実地時期については付帯条件がついていて、「景気の動向やレジ袋の削減状況等に配慮して」決定するとしている。その削減目標は平成１５年７月で辞退率が３３％（以後、毎年７ポイント程度ずつの向上を目指し、５年間で６０％）となっている。平成１６年１月の調査時点では、辞退率は２６.１％、併用者

（マイバックに入りきらないためにレジ袋を受け取った人）を含めても２８.２％であり、目標には届いていないし、５年後の目標６０％は夢のまた夢という状況が続いている。

杉並区では、レジ袋税導入の理由として、次のようなことをあげている。

・区内で年間１億７，０００万枚～１億９，０００万枚のレジ袋が消費され、この処理に年間１億円の経費を要していること。
・燃やせば地球温暖化の原因となる二酸化炭素を排出し、埋め立てれば、土に還元されることがなく、半永久的に土中に残る。
・一部は街中や路上に投棄され、川やさらに海まで流れ蓄積されて環境を悪化させる。
・レジ袋は、現代社会において、必要不可欠な品物ではなく、ちょっとした努力（買い物袋を持参する）によって不要になるもの。

（「すぎなみ環境目的税のねらいとしくみ」より抜粋）

たしかに、「たかがレジ袋」という発想があってもおかしくはないだろうが、しかし、「たかが買い物袋」という発想の方が合理的だろう。たかが買い物袋を車のダッシュボードに入れておくことは何ら苦痛も困難も伴うものではない。（もし、適当な機能のものさえあれば）鞄の中身に折り畳み袋を加えることも何ら問題がない。

レジ袋税を導入するかどうかということに関しては議論の余地はあるだろが、買い物袋を持参し、レジ袋を辞退するべきであるということに関しては議論の余地はない。それによって、何ら苦痛も不便も伴うことがないからだ。簡単な心のトレーニングと、鞄に常時入れておくことができる適当な折り畳み袋があればいい。

しかし、この心のトレーニングというのが結構難しいらしい。杉並区が行った意向調査*によると、レジ袋税が導入された場合、約７０％の人が買い物袋を持参すると回答しているという。このデータは、ちょっと恥ずかしいのではないか。レジ袋税とかゴミ処理の有料化とかいう、いわゆる経済的手法は、（多少乱暴な表現をするならば）、人の悪しき心や習慣をお金で矯正するという手法である。札束で頬を叩かれるのならまだしも（？）、５円玉で習慣を変えようということに、積極的に乗ってしまう国民というのは、ちょっとヤバイのではないだろうか。「せめて、その前に」と思うのが普通ではないだろうか。

＊レジ袋削減運動等に関する認知度調査、杉並区、H16.1

有料制は人の品性を計るバロメータ？

ゴミ処理手数料の有料化を実施する自治体が増えている。たいがいは収集袋を指定して、たとえば１袋いくらというような形で徴収している。自治体によって、「指定袋制」と呼ぶ場合と「有料制」と呼ぶ場合があるが、基本的には袋の製造と販売に要する価格のみの場合には指定袋制、それに収集・処理料金の一部を加算した場合は有料制ということになるのだろう。概ね１袋１０円程度の場合は指定袋制、それ以上の場合は有料制ということになるのだろうが、有料制の場合、どのくらい上乗せするかは自治体によってまちまちだ。はっきりしたデータはないが、１袋５０円前後というのが平均的なところだろう。特にこれといった金額を決める基準はなくて、ゴミ処理に要する経費の何パーセント、実際は近

場の市町村の状況を観察しながら決められる。隣町より安ければ隣町のゴミが流入する可能性があるし、高ければ他所様に迷惑をかける可能性がある。

有料制を導入する目的としては、元々は「市町村財政負担の軽減」ということが第一義としてあり、さらに建前としては、「受益者負担の原則（ゴミをたくさん出した人が多く負担し、減量に努力した人は少なくてよい）」あるいは「ゴミ問題への住民意識の向上」ということがあげられているが、やはり、一番の目的は、「ゴミの減量化・リサイクルを推進する」ためのきっかけにするということがあげられる。つまり、金で人の心と習慣を縛るというやり方だ。

で、その結果はというと、「有料化直後は大きく減量化するが２・３年後には上昇カーブを描く」ということが一般的に指摘されている。つまり、最初は「５０円も出すのだから、なるべくゴミを出さないようにリサイクルしましょう」という意識が勝つのだろうが、しばらくすると、「たかだか５０円」ということになるのだろう。

おそらく、私たちの経済レベルからすると、「たかだか５０円」という感覚は当然のことなのだろう。先のレジ袋の件でも、５円のレジ袋税が導入されることになったら買い物袋を持参すると回答した７０％の人々も、アッという間に「たかだか５円」ということになってしまうのは目に見えている。しかし、それは、おそらく、「私たちは金で頬を叩かれるほど下劣ではないということを意味している！」ということではないだろう。

それでは、いくらならば金で頬を叩かれることに甘んじることができるのだろうか。

その前に、ゴミ処理に要する費用は実際にどの程度なのだろうか。平成１３年度のゴミ１トン当たりの処理経費は約５万円だから、私たちが集積所に出すゴミ袋１個の重量が３キロならば１５０円、５キロならば２５０円、１０キロならば５００円ということになる。

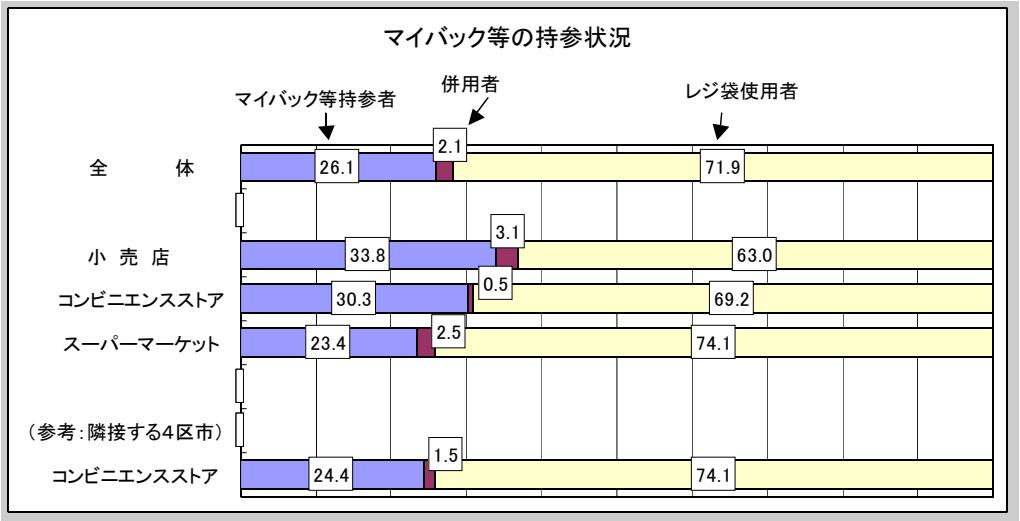
仮に１袋２５０円ならば、私たちはゴミの減量に真剣に取り組むことが出来るだろうか。それはよく分からないが、全額徴収するということになると、それは市町村がやるべきことではなく、民間の仕事ではないかという意見も出てくる。

民間が競い合いながら自由にゴミの処理を請け負うことになると、何が起こるかというと、簡単に想像できることは、処理業者による不法投棄と住民の不適正処理。極力安く処理するためには焼却よりもそのまま埋立が一番で、リサイクルには見向きもしないだろうし、住民としても業者に出すよりは自分で焼くか地中に埋め立てた方がいい。ダイオキシン問題なんかどうでもよくて、可燃ゴミは庭で焼却するようになるだろう。ゴミを取り巻く多くの問題は、今よりはるかに悪化するだろうことは容易に想像できる。

ゴミの処理が市町村の責務となったのは１９００年のこと。コレラ・ペストという伝染病を予防することを目的としたものであった。それから、１００年余、体の病から心の病にシフトしたという違いはあるにせよ、私たちは未だにその呪縛から逃れることができない。

レジ袋税が導入されたら

実態 → マイバック等持参者は約２８％（併用者を含む）



出典：マイバック等持参状況調査（平成１５年第２回）、杉並区

レジ袋税導入後に予測される行動 →７０％が買い物袋を持参する意向

環境目的税導入後に予測される行動（単数回答）

選択肢		割合（%）
1	買い物袋を持って買い物に行く	70.3
2	５円支払ってレジ袋をもらう	10.7
3	杉並区内で買い物をしない	3.5
4	その他	3.2
5	わからない	7.1
	無回答	5.1
全体		100.0

出典：レジ袋削減運動等に関する認知度調査、杉並区、H16.1

４．ゴミを捨てる風景

－何故、私たちはタバコをポイ捨てしてはいけないのかー

棄てる快感

人並みにというほど華やかではないが、私にも、たとえば、駅のホームの片隅で人待ち顔にたばこの本数を重ねた経験は、ある。地面に捨てた吸い殻の数が情熱の証であるかのような錯覚（こう言い切ってしまった時から私の中年時代が始まったわけだが）に陥ったものだ。

自動販売機で買ったワンカップ大関を、まだ半分も飲まぬうちに、思い切りブロック塀にぶつけた青春も、あった。ガシャーンというビンの砕け散る音。あの時にはどんな出来事があったのだろうかと考えてみるのだが、どうしても思い出せない。今にしてみれば、たぶん大したことではないのだろうが、苛立ちだけの青春だったなあと、ちょっと甘酸っぱい気持ちでビンの衝撃音を思い出すのだ。

夜更けの誰もいない道路で、カラーンという、空缶が地面を転がる音、これもやはり挫折という名の青春時代特有の音だった。

棄てるという行為には、たしかに、人のロマンとか郷愁とかをくすぐる何かがある。この＜何か＞と相対して棄てない習慣・ライフスタイルを形成するのはかなり大変なことだと思う。

一口に棄てると言っても、その状況、動機、背景、あるいは悪さの程度は、まちまちだ。

まずは、棄てる動機。金儲けのために不法にゴミを棄てる人もいれば、金を出したくないために物を棄てる人もいる。あるいは、金の出入りには関係ないがただ単に「面倒だから」という理由で棄てる人もいる。

棄てる人の種類も違う。普段めったにお会いすることがないようなとんでもなく悪い人もいれば、「まさかあの人が」と思われるような普通の(?)人も、やはり物を棄てる。それは、「近頃の若い人」特有の問題なのか、あるいは、「マナーを劣化」させるような社会現象のせいなのか。

まずは、いろいろな「物を棄てる風景」を眺めてみよう。

豊島・青森・岐阜

平成２年、香川県豊島（てしま）で約４７万ｍ^{3}という大規模な不法投棄が発覚した。無許可のまま、自動車を破砕した残渣（シュレダーダスト）等を収集処分し、野焼きなどを続けたものだ。また、平成１１年には青森・岩手両県にまたがる森林・牧草地帯で、約８８万ｍ^{3}と豊島を大きく上回る不法投棄が発覚した。さらに、平成１６年３月には岐阜市でも大規模な不法投棄が発覚した。あるいはまた、このところ、脱税を目的とした不正軽油を密造する際に副産物して発生する硫酸ピッチが全国各地で大量に不法投棄されているのが発覚している。平成１１年には医療廃棄物を含む大量のゴミが、再生用古紙と偽ってフィリピンに持ち出されたという事件もあった。

こういうことをするのは普通の人達ではない。私たちの身近な所に普通にいるわけではなく、いってみれば特殊な世界で蠢いている人達だろうから、警察の手を借りなければどうにもならないようなケースだ。ライフスタイルという範疇を越えているケースだ。

テレビを捨てる人

人里離れた山地や谷間にテレビや自動車を置き去りにする人。特に、平成１３年に「テレビ・エアコン・冷蔵庫・洗濯機」など４品目を対象にした家電リサイクル法が施行され、処理のための費用を徴収されるようになってからは、これらの不法投棄が懸念されている。現時点では、テレビの不法投棄が特に目立っているようであるが、他の品目の不法投棄も今後は増加するであろうし、自動車やパソコンなど処理料金の負担が直接廃棄者に課せられる品目が増えるに従い、不法投棄も増えるであろう。

夜陰に紛れて、市街地から外れた山間の自然公園の駐車場にナンバーを外した乗用車を置き去りにする人は、どんな人なのだろうか。たぶん、ごく普通の人というわけではないのだろうが、特殊な世界にいる人というわけでもないだろう。いずれにしても、尋常な手段では、こういう事例を防止することはできないのだろうし、ライフスタイルの問題でもないだろう。

便乗ゴミ

平成１６年６月２７日午前７時２０分、佐賀市南西部で竜巻が発生した。竜巻は時速６５キロの速度で幅３００メートル約８キロの距離を駆け抜けた。わが国では史上５本の指に入るという規模の竜巻だったという。佐賀市環境センター所長（当時）片岡卓司は、竜巻が発生した地域から僅か２キロの地に住んでいた。その日は、午前６時頃から横殴りの雨が叩きつけ落雷が鳴り響いていた。その時、突然、物凄い轟音と共に真っ白になり、家が震えた。間もなく、風は止み小雨になった。様子を見ようと車を走らせると、瓦礫が路上に散乱し山のようになっており、車は走行不可能な状態であった。遠くに目を向けると、瓦礫と化した家屋があり、納屋が丸ごと吹き飛ばされ、電柱が倒れていた。そして、異様なほど静かだった。人影が全く見えないのだ。

片岡は車の方向を変え、環境センターに駆けつけた。市役所の防災室に関連のメンバーが揃ったのは１０時３０分頃だった。市長以下３０名程度の者が揃い役割分担を決めた。片岡は災害廃棄物の調査と収集に当たることになった。

普段は不法投棄ゴミを監視・収集する役割を担っていた環境パトロールを召集し現地に向かわせたが、手作業での収集は不可能な状況であり、九州電力の給電線の復旧工事のため道路が塞がれたこともあり、本格的な収集作業は翌日まで出来なかった。

職員に自転車を用意させ、地域を分担し、ゴミの散乱場所と量を調査した結果、散乱ゴミの量は３００トンと推定された。記者発表すると共に、民間のゴミ収集業者の団体に、回収業務を委託した。その調査結果から、清掃工場だけでの対応は困難であると判断されたので、焼却可能物のみを清掃工場に搬入し、それ以外の大部分は最終処分場に持っていくこととした。

しかし、その調査結果は大きく外れることになった。僅か２週間後には８００トンを超えるゴミが搬入されることになった。調査結果には家屋の解体ゴミは含めていなかったので、当然、しばらく後には解体に伴う廃棄物が排出されることは予測していたが、それにしても多すぎた。片岡は集められたゴミを見て愕然とした。災害ゴミを「災害によって破損した物」と定義したとすると、一見して、災害ゴミとは思われないゴミが大量に排出されていたのだ。家電４品目、小型家電製品、旧式のパソコン、ワープロ、タイヤ、ドラム

缶、小型農業用機械、たんす、その他の家具類、崩れていない置物、埃をかぶって綺麗に丸められている絨毯、ペンキが入ったままの一斗缶等々、どうみても便乗ゴミとしか思えない物。今まで捨てるに捨て切れなかった物なのだろう。

暑いさなか、環境センターの職員が総出で調べ集め、仲間の汗の結晶とも言うべきゴミの中に、便乗ゴミが大量に含まれていたことに、言いようのないやるせなさを感じたという。（片岡卓司、災害廃棄物の実態と課題、生活と環境、平成１６年６月号）

あるいはまた、平成１６年は、台風の当たり年で本土上陸数の記録を更新したということであるが、この台風によるゴミの処理も実に大変な作業であったという。瀬戸内海沿岸では、台風接近時がちょうど満潮時と重なっていたこともあり、高潮の被害がひどかったそうであるが、ここも集めたゴミを子細に観察すると、どうも変だというものが多く排出されていたという。

こういう、いわば＜便乗ゴミ＞を出す人というのはどういう人だろうか。たぶん、ごく普通の、(「私も含めて」というと、やはり職業上問題なので、「私の親兄弟も含めて」)、多くの人が魔が差してしまうことなのかもしれない。困った時だから許してもらえるだろうという、言ってみれば、行政に対する甘えなのかもしれないが、やはり、それはいけないことだろう。

タバコを棄ててはいけない

道にタバコを捨ててしまう人。よく見かけます。それはマナーにもとる行為であることは間違いがない。しかし、みんながみんな悪い人かというと、必ずしもそうではないかもしれない。普通の人なの（何が普通かは難しいけれど）に、ついついやってしまう、そんな人も多いのではないだろうか。強いて言えば、火を付けたまま放り捨てる人は「悪い人」で、火を消してから周りをキョロキョロ見回してから棄てる人は「悪いことをしてしまった人」ということになるのだろうか。あるいは、「空き缶を捨てる人」、「タバコを捨てる人」、ついでに「ガムを捨てる人」‥‥‥どの人が一番いけない人だろうか。

閑話休題。

さて、私たちは、何故、タバコを路上に捨ててはいけないのだろうか。たとえば、広い畑の中で農作業に勤しんでいる人が、「さて一服」と吸ったタバコの火をよく消して、その畑に捨てたとして、非難することができるだろうか。

私たちが、道路にタバコを捨ててはいけない理由は、大きく３つ。

一つは、人口の集中。人がたくさん集まるバス停や繁華街でタバコを捨てるのは困る。それは見苦しさの量の問題だ。

また、一つは、路面の舗装。タバコの葉を土に戻すのなら問題ないだろうが、その土がない。それは都市整備のあり方の問題だ。

三つ目は、タバコ自体のフィルターの問題。自然に帰りにくい素材が含まれているものを自然の中に捨てるのはよろしくない。

これらは、いずれもマナーの問題ではない。社会が、あるいは文明の姿が変わったことが大きな問題なのであって、決して「近頃の若いモン」のマナーが低下したせい（だけ）ではない。

我が家の前の幅３メートルほどの道路。たかだか隣り近所十数軒の車と郵便配達の車し

か通らない道なのに、しっかり舗装されている。そんな必要無いだろうに、ここまで徹底することはないだろうと思うことがある。せめて、アスファルトではなくコンクリートでもない、もっと違う素材を開発する余地はなかったのだろうか。

あるいは、また、タバコのフィルターを考えた人はどんな人なのだろう。確かにすごいアイディアだとは思うが、それによって人はどのくらい恩恵を受けたのだろうか。健康という点からは、もっと違う方法があったのではないだろうか。

最悪なのは、「近頃の若いモンのマナーはなっとらん」という一言ですべてを終わらせてしまう風潮であって、大切なことは、その根っこにある社会の在り様を考えていくという習慣を持つことだろう。

ポイ捨て条例という名の帳面消し

ポイ捨て条例というのがある。けっこう多くの市町村で制定されているが、その割にはあまり人々には意識されていないという不思議な条例だ。

「全国まち美化連絡会議」が、人口２万人以上の市町村を対象にアンケート調査した結果*によると、約５０％の市町村が、「ポイ捨て防止条例」を制定済みあるいは制定作業中であると回答しているという。このポイ捨て条例の約半数には罰金の規程が設けられているという。しかし、その罰金が適用されたという噂はいっこうに聞かない。

＊ポイ捨て防止条例等に関するアンケート、全国まち美化連絡会議、2002.3

また、このアンケートでは、罰金や氏名公表等の罰則規定の必要性に関して質問しているが、直接的な抑止効果を認めるものは約９％と少なく、「意味がない」あるいは「啓発効果はある」という消極的な意見が目立つ。興味深いのは、条例制定のきっかけとしては、「議会や住民の要請」あるいは「首長の意向」という受動的な動機が多く、担当者が必要を感じて主体的に条例を作ったことを示す「担当部署内の検討の結果」という回答は、僅か２１％にとどまっていることだ。運用が難しく、効果が無いのは分かっているのだが、「やらないというわけにはいかない」という声が聞こえてきそうなデータではある。

棄てない技術

たしか、昭和５０年代の頃だったと思うのだが、飲料缶のプルタブが問題になったことがある。たとえば海水浴場の自動販売機の周りに棄てられたプルタブで足を怪我した、あるいは、川や海に棄てられたプルタブを魚が誤飲したということが問題化し、散乱ゴミの象徴として扱われていたことがあった。海外ではステイオンタブが普及しているのに、何故日本では普及できないのだと業界誌にたびたび掲載された。主に衛生上の問題だったのだろうが、ステイオンタブが導入されるまでかなりの紆余曲折があったように記憶している。

いつからステイオンタブに切り替わったか正確には把握していないが、たとえば宝酒造の＜緑字報告書２００４＞によれば、１９８９年にわが国で最初にプルタブを採用したとの記述があり、コカコーラのＨＰによれば１９９０年にステイオンタブがエコマーク該当商品に認定され、同社も１９９０年にステイオンタブを導入したとある。また、サントリーの＜サステナビリティレポート２００４＞によれば１９９１年にビール業界で初めてステイオンタブを採用したとある。いずれにしても、この時期にプルタブからステイオンタブに一斉に移行し始めたことは確かだろう。そして、平成７年度版環境白書には、「ステ

イオンタブ缶のように一般化したことからエコマークを付ける必要性がなくなり、対象品目から外れたものもある」と記述されている。アッという間に、プルタブという散乱ゴミ問題は解決し、僅か数年で環境問題としての関心からも消え去ってしまった。いかにも日本らしいといえば、いえるのだろうが、面白いのは、アルミ缶リサイクル協会のＨＰに、今でもこんな記述が残っていることだ。

＜「アルミ缶のタブを集めると車椅子がもらえるという話がありますが、どこへ連絡したら良いのですか？」という問い合わせがあります。当協会では、そういう事に一切関係しておりませんし、タブだけを集めるようにも奨励もしていません。せっかくアルミ缶を集めていただけるなら、タブだけを集めるのではなく、タブを取らずに「アルミ缶そのもの」を集めてください＞

せっかく、取れないように改良したタブを一生懸命剥がそうとする姿を想像すると、ちょっと哀しくなるが、技術の進展と人の意識の転換のテンポがちぐはぐということはよく見受けられることではある。

ともあれ、プルタブの散乱問題は技術で解決することはできたが、それがすべてに通じる解決手法ではないというのは言うまでもないだろう。

律儀であることの難しさ

「僕は律儀な人間だ。『止まれ』の赤信号を見ると、止まる。『すすめ』の青信号になってから、やっと歩き出す」

数えたことはないが、たぶん数百冊の小説を読んできた。ところが書き出しの文章を空でいえる小説というのは意外と少ないもので、たったの三冊しかない。「国境の長いトンネルを抜けると」（雪国）、「今日ママンが死んだ。ひょっとすると、昨日かもしれないが・・・」（異邦人）、そして冒頭の一節。アクショーノフ「星の切符」という小説。

人はなぜ、空き缶やガム、タバコといったゴミを無造作に棄てるのだろうか。

簡単なことだと思う。人は不要になったものにまで心を配るのは面倒だから。ハイキングの帰りに弁当の容器、ジュース缶を持ち帰るのはとても面倒なことだし、燃えるゴミと燃えないゴミと資源ゴミの３つの袋を用意することはとても面倒なことだ。

その面倒くささをどう解消すればいいのだろうかと考えた時、アクショーノフのいうところの「律儀」という言葉が浮かんできた。棄てようとするものに心を残す、心を配る、そういう律儀な生き方、極言すると小市民的な生き方が人々の間に習慣化したら、ゴミ問題の大方のところは解決すると思う。法や条例による規制や技術による改良は必要なことではあるが、おそらく意識が変わらない限り、いたちごっこに終わるだろう。

“棄てる”という行為には、ニヒルさとかスマートさとか、なにやら人の美意識をくすぐる雰囲気が漂っている。“女を棄てる”というのはその典型で、律儀さとはほど遠いカッコよさがあるし、テレビや映画でも、館ひろしとか、柴田恭平とか（古い！）がタバコを無造作に路上に棄てる時がアクションのはじまりという趣があるわけだし、昔、私がワンカップ大関を思いっきりブロック塀に投げつけたことだって、今思い出すと、なにやら“青春”という感じがしていい気持ちにさせられることがある。

このように“棄てる”という行為は人の生き方の美意識に深く根付いているのだが、それに反して“律儀さ”というのはどう見ても高い評価を与えられていない。

アクショウーノフ「星の切符」の、冒頭の文章の続きがどうなっているかというと、「・・・弟のやつはー別だ。ディームカは赤信号でもおかまいなしに突っ切る。ようするにやつはいつも、気の向いた方へいきなり突っ走ってゆくのだ。」

これでもうこの小説の主人公が誰になるかということが一目瞭然なほどで、律儀さというのは肩身のせまい存在だ。

この美意識の差をどう克服するかということになると、私達にはどうすることもできない問題だ。

たとえば、路上に棄てたタバコをさりげなく拾い上げ、ハンカチに包んでポケットに入れる・・・こんなシーンをニヒルに演じてくれる俳優さん、いませんか。塀にぶつけてたたき割ったワンカップ大関の破片を自ら拾い集める姿に男の淋しさを感じさせてくれる小説家いませんか。

遠藤周作の作品の中に「私が・棄てた・女」というのがある。その最後のページに、かつて主人公が犬ころのように棄てた「ミツ」という女性を回想するこんな文章がある。

＜その数え切れない人生の中で、ぼくのミツにしたようなことは、男なら誰だって一度は経験することだ。ぼくだけではないはずだ。・・・しかし、この寂しさは、いったいどかから来るのだろう。ぼくにはいま、小さい手がたい幸せがある。その幸福を、ぼくはミツとの記憶のために、棄てようとは思わない。しかし、この寂しさはどこからくるのだろう。＞

私自身も含めた多くの人々が、「ミツ」という名を「ゴミ」という言葉に置き換えて、ロマンを失った物たちに接していきたいものだ。おそらく、それが、究極のライフスタイルのトレーニングになるのだろうと思う。

ナンバープレートを外した放置車。内部もゴミの山

５．　だって、ボク悪くないモン症候群（おわりに）

正義症候群

＜おおらか＞というより＜いいかげん＞、＜いいかげん＞というより＜ちゃらんぽらん＞、そんな２年間のインドネシア赴任から日本に戻ってびっくりしたことがある。

山口県某市某交通のバス運転手が勤務中にバスを降り、近くの弁当屋で弁当を買っていたことが分かり同社は平身低頭。「常識では考えられないことで、大変恥ずかしい。２度とこういうことのないように全従業員を再教育する」と同社の部長さん。ご丁寧に運輸省のお役人のコメントまで載っている。夜９時前、乗客２名、弁当を買うために要した時間２、３分のことだという。（毎日新聞、平成８年５月３日）

この記事を見て私は腰を抜かしてしまった。帰国後まだ１カ月。頭のリハビリも終わっていない時のことだ。はじめ、それはジョークだと思った。しばらくいない間に日本のジョークの質が変わったのだと思った。しかし、その割にはからかうためのイラストも付いていないし、囲み記事というわけでもない。どうやら本気で怒っているらしい。

まずはこの話を新聞社に持ち込んだ人間。たかだか２・３分の停車が新聞社に訴えるほど腹立たしいことなのか。「遅いぞー」「すみませーん」で済むことじゃないか。そしてこの事件（出来事と言った方がすんなりくる）が、紙面約百平方センチメートルも費やす内容か。運輸省のお役人にまでインタビューする内容か。

遅いぞー、すみませーんという簡単な会話ができなくなった国というのは恐いと思う。それを一大事のように報じて、運輸省の手まで煩わし、なおかつ別のところでは行革を叫ぶという、イジメにも似た正義漢体質も恐いと思う。

人の持つ怒りとか喜びとか悲しみとか苛立ちとかそういった感情は何らかの方法で発散しなければいけないものだ。口に出して発散する術を失った現代人は、ある者はパソコンやビデオという内向的な文明利器にはまりこみ、ある者は投書や電話というやはり内向的な手段で権威に頼り、それでも満たされない場合は発作的に犯罪に走る。それは病というべきであろう。

更に、そういう内向的な病を、異常とも思える正義感で肯定する風潮というのは、別の種の病かもしれない。

テレビのニュースショーを見ていると、おぞましい気分にさせられることがある。キャスターとかレポーターとか言われる人達の異常なまでの正義感。芸能人の浮気くらいで、人格破綻みたいに言うなよ。

もちろん、それは、テレビを見ている人に好まれて存続しているわけだろうから、世の中そんな正義漢だらけということなのだろう。

イラクで拘束された何人かの人達が解放されあるいは殺害された際に、さかんに口にされた自己責任論ということも正義症候群の一つだろう。テロを許さないという一方の正義を守るために、人の失敗の一片も許さないというその発想に人の情というものが少しも見えてこないのは、やはり正義症候群という現代の大きな病の一つではないだろうか。

誰も彼も、他人の行為の僅かな過ちも許さない。一点の曇りも許さないという姿勢は怖い。この正義症候群がもたらす弊害は二つ。

一つは、情報公開という現代社会で必須事項となったキーワードを円滑に推進する際の大きな障害になっていることである。明らかに紛糾され事態が一歩も前進しないことになるだろうことが予想されるなら、「ちょっと待て、情報公開」という気分になっても非難はできないだろう。

そして、もう一点は、他人に対する正義を要求するあまりに、ついつい我が身に対する追求が甘くなってしまうということである。

だって、ボク悪くないモン症候群

＜ボク＞に限らず、＜オレ＞でも＜ワタシ＞でも、若い人も年老いた人も、結構いますよね。まず言い訳をして、それから自分は悪くないと主張する人。ただ責任転嫁に走っているだけなのだろうと思うのだが、どうやらそればかりではない。かなり強い信念を持って自分は悪くはないと主張している。それでは、悪いのは誰かというと、大概の場合は＜世間＞であって、もっと具体的に言うと＜国家＞であったり＜政治家＞であったり＜役人＞であったり＜教師＞であったり、身近なところでは＜上司＞であり＜部下＞であり、あるいは＜町内会の世話役＞であり、通りすがりの＜にいさん＞であったり＜じいさん＞である。自分はちゃんとやっているのに、そういう回りがダメだから上手く行かない、だからばかばかしくてやってられない、という人が目に付く‥‥‥というようなことを、この数年いろんな人達に言ってきたのだが、「いる、いる、そんな奴いるなぁ」というのが大部分の人達の感想だから、つまり、私自身も含め日本全体がそんな社会になっているということなのだろう。

このような、言ってみれば＜ボク悪くないモン症候群＞と＜正義症候群＞が混在する社会の一端を、ゴミ問題という側面を通して眺めてきたが、ゴミ問題を解決することによって、これら現代社会の病を解決できるとは思わない。しかし、改善に向けた訓練をするための道具の一つにはなりうるのではないだろうか。

少なくとも、私たちは「モノを大切にしましょう」「もったいないという気持ちを大切にしましょう」「分別してリサイクルをしましょう」「空き缶を棄てるのをやめましょう」というような普及啓発、言い換えれば押しつけ型の環境教育から卒業するべきだと思う。ゴミ問題は、それを前にして、ああでもないこうでもないと考え、語り、行動してみることによって、自然に社会全体の病を癒していくためのツールとして、もっと重要な役割を与えられてしかるべきだと思うからである。

現代社会に生きるすべての人々に、

空き缶と、ペットボトルと、ワンカップ大関と、トレイと、卵パックと、紙コップと、タバコの吸い殻と、百円ライターと、廃自動車と、廃テレビと、食べ残しのご飯粒と、賞味期限切れのハム・ソーセージと、鼻をかんだティッシュペーパーと、割り箸と、レジ袋と、広告チラシと、紙おむつと、流行遅れの衣類と、塩ビ製のラップと、乾電池と‥‥‥

そんな、あらゆるゴミを捧げたい。